

「地域の農業を盛り上げていきたい」
清水 浩次さん(田結)

清水浩次さん(36才)は5年前に農業スクール卒業後、水稻栽培を中心に就農しましたが、玄武洞近くの農家が離農されるという話を聞きつけ「なんとかできるのでは」と3aのブドウ栽培を引き受けました。

3年目からは、近所のブドウ農家から6a、さらに翌年には別の6aのブドウ畑を引き受けるなど年々面積を拡大。種類もピオーネ、藤稜、安芸クイン、シャインマスカット、高妻と多品種になりました。

また「港認定こども園」の園児たちに、ブドウの枝や葉、実のつき方などの観察や、ブドウ狩りなどを楽しんでもらっています。



ブドウの収穫時期は稲刈と重なり、ハクビシン等の食害に気が付かないことも。近くの農家の畑もクマの食害でほぼ全滅したとのこと。

来年度には弟さんが農業スクールを卒業し、野菜を中心にブドウも栽培する予定です。

さらに1年後には、気比区の農業スクール卒業生が就農予定で、今後は「若手3人で地域の農業を盛り上げ、気比の田んぼも守っていききたい」と熱い思いを語っていただきました。

(農業委員 高尾 利美)



地域の活性化を目指す青年農業者!
植田 蒼空さん(但東町唐川)



植田蒼空さん(21才)は但馬農業高等学校を卒業後、認定新規就農者として実家である但東町唐川で施設及び露地野菜、果樹栽培(合計約60a)に取り組まれています。

家は尙植田農園として父(博成さん)が水稻栽培10haと田植え、刈取り等の作業受託をされています。

蒼空さんは施設及び露地野菜として独立経営を行い、青色申告をされています。

施設栽培は、父の水稻育苗後のハウス5棟を利用して、但馬で最初の全農「ういずOne」システムを採用、ハウスに防草シートを敷き、発砲スチロール箱や受皿付ポット等の栽培槽を用いた隔離床養液栽培で行って、中玉トマト、キュウリ、ピーマン、ホウレンソウを栽培されています。露地栽培では、サトイモ、トウモロコシの栽培、また果樹として朝倉山椒の栽培も始められました。

ハウス内は土を使わないため、①土作りが不要で連作障害の心配がない、②普段の靴で動け、汚れない、③女性でも容易に作業ができる、④設備の設置が自由でかつ撤去も容易にでき、遊休ハウスの有効活用が図れるなどのメリットがあるとのこと。

出荷はJAを通じて市場へ、また「たじまんま和田山」や地元の「シルク温泉やまびこ」、「但熊」で販売されています。

今後は、面積も拡大し、「地域の人においしいと言って食べてもらうこと」を目標に、「地域の子供達による農業体験もやっていきたい」と抱負を語っておられます。

(農業委員 井谷 勝彦)

三江地区
(豊岡地域)



豊岡地域の三江地区は、豊岡市の東部に位置し鎌谷川・六方川の流域沿に10行政区・約1350世帯で構成されています。

農地の面積は約160ヘクタールあり、また多くの住宅や団地なども立地しています。

三江地区ではコウノトリの郷公園の建設でコウノトリと共生できる環境づくりが地域を挙げて取り組まれ、農業では環境保全型の水稲づくり、アイガモ農法、冬季湛水など多様な生き物を育む水田づくりとして取り組んできました。

しかし近年、耕作者の高齢化、後継者不足、担い手不足などの理由により、アイガモ農法は減少していき、さらに農地の遊休化が年々多くなってきました。この遊休農地の特徴は、水の管理が難しい(水の供給ができない)、農地が軟弱(じるい)、農地までの農道が悪い(でこぼこ、狭い)などが挙げられます。



霜澤農業委員



河本推進委員



三江地区の農地状況

城崎地域



この様な条件の悪い農地は引受ける耕作者が少ないのが現状です。この問題は、三江地区だけでなく他の地区もあると思います。

今後は農道の整備、水利の維持管理、有害鳥獣への対応と共に、各集落内の農業の現状や課題、それらを踏まえて将来の農地利用の姿を明確化する「地域計画」への取り組みも重要になってきます。

私は農業委員として、今後も三江地区の農業を少しでも守るお手伝いのできればと思っています。

(三江地区農業委員 霜澤 良雄)

城崎地域は、円山川東地域(結・戸島・楽々浦・飯谷)に低湿田の中山間小規模農地が多くあります。1反(約1000㎡)以下の山間棚田だけでなく、土地改良した圃場についても、農業者の高齢化、担い手後継者の不足により、自己保全の後も、遊休農地化しています。

最近では、飯谷区の耕地の一部が、北近畿自動車道・城崎道路のインターチェンジの予定地として決まり、地域の優良な農地が今後なくなること、で、「営農継続の意欲も失われる」という声も聞かれます。

そのような中、戸島、下島耕地では、圃場整備事業により、それぞれで営農組合を組織され、周辺地域の遊休農地も一部請負し、田んぼに復活しているところも出てきています。

また、城崎地域の農地の多くは、山裾に位置し、有害鳥獣の対策が必須です。特に来日・上山・二見区では、



和田農業委員



北村推進委員



収穫前、草刈りされた農地



遊休農地の水路保全活動

の他、豊岡市の補助制度の拡充が期待されます。

かつて、先祖が切り開いた山間の田畑、今では多くが遊休農地となっています。高齢化、担い手の減少の中、今後の集落の維持のためにも、持続可能な農地を残していくことが必要だと思っています。

(城崎地域推進委員 北村 幸弘)

シカ・イノシシの他、サルへの対策が欠かせません。収穫を間近に控えた農地では作物の被害が多く、国や県